

# 1年次における「基礎演習」科目導入のねらいと実際\* ——「環境文化基礎演習」初年度講義を終えて——

若松孝司

## Significance and Evaluation of Pre-Seminar in Freshman Courses

WAKAMATSU Takashi

### はじめに

今年度（2000年度）、愛知淑徳大学（以下「本学」とする）に新しい学部として、文化創造学部が設置された。本学部では第1学年前期に「基礎演習」科目を必須受講としている。本稿は、新たな試みとしての、この演習科目についての初年度の実施報告と来年度以降の改善策の提案を目的とするものである。

### 1. 「基礎演習」科目設置の背景

大学の教員、とくに筆者のような文科系の教員にとって、大学における学習とは自ら習得する、あるいは先輩のやり方を見てそれを真似して習得するものというのが一般的な認識であった。しかし、大学進学率が5割を超え、それとともに必然的に「学習意欲のない」＝「勉強の仕方を知らない」学生が増加しつつあることは否定できない。そういった学生にとっての勉強とは、基本的に教員の板書を写し、与えられた問題を解くというものである。しかし大学においては、板書のないノートを取り、自分で研究テーマを決め、図書館で資料を検索・入手し、レジュメにまとめ、学生や教員の前でそれを発表するといったまったく新しい学習をこなしていかなければならない。

また、大学生が考える「大学の魅力要因」の上位には、「授業がわかりやすい先生が多い（1位）」「自分の好きな勉強ができる（2位）」「授業を工夫する先生が多い（4位）」といったように、就職に関する「魅力要因」と並んで、授業・講義に関するものがランキングされている。これは「交通の便がよい（11位）」や「最新のコンピュータ施設が充実している（13位）」といった大学の施設・設備面に関することや「専門分野で活躍する先生が多い（25位）」といった研究機関としての大学の役割といったことよりも、自らの興味のある分野をわかりやすく教えてくれることを望む学生の姿勢を示しているものといえる。

しかし、少人数による学生指導は、従来、3年次以降に開設される専門科目における演習

\*本研究は2000年度愛知淑徳大学研究助成による助成を受けて行われた。

あるいはゼミナールに限られ、それまでは大学における学習方法を教授する機会がなかった。このため、学習方法論を大学入学直後に学ぶことは、大学教育に対する魅力を高めることに貢献すると考えられる。そこで、基礎演習や基礎ゼミとかたちで専門科目の演習とは別に、大学入学直後に学習方法論をカリキュラムに導入している大学が増加している。本報告の対象である本学の文化創造学部文化創造学科環境文化専攻における「基礎演習」科目も、こういった大学を巡る社会状況を背景に開講されている。

## 2. 「基礎演習」導入のねらい

### 2-1 環境文化専攻の理念と基礎演習

環境文化専攻は、「文化創造」という本学部の理念を総合的観点から理解することを目指す「総合科目」、 「文化創造」の理念を実践的に支える「表現技術科目」、幅広い視野を持つ「関連科目」、これら3区分の共通科目の履修を通して学生が関心を抱いたテーマを、さらに深化すべく専攻独自の「中心科目」を置く。さらに「中心科目」は「生活文化としての環境の理解とその改善」をカリキュラムの基本コンセプトとし、「基礎」「創造各論」「環境各論Ⅰ」「環境各論Ⅱ」「環境文化創造原理」「技術」「発展」の各科目群によって心理、健康、衛生、衣・食・住、地域社会、認知情報処理等に関する講義・演習科目を配置している。

「環境文化基礎演習」は資料収集法、資料分析法入門とならんで「基礎」科目群に属し、環境文化の最も基礎的な知識や技術を演習、および講義の両面から学ぶことを目的としている。また、本演習における少人数クラスを学生の所属クラスとし、当該担当専任教員を担任教員とすることで、学生が3年次に「環境文化購読演習」のゼミに所属するまでクラスの学生の履修や学生生活に関する相談を受けるものとしている。このように基礎演習の受講生を担当学生とすることで、学生に対してきめ細かい指導・助言や学生との交流を図るとともに、学生生活に関する相談を設ける体制としている。

### 2-2 本学の「基礎演習」の特徴

前節で触れたように、本学以外にも同様の演習を導入している大学は多い。

たとえば、立命館大学経済学部では、1年生全員を対象として1年間にわたって「基礎ゼミ」という科目が設置されている。ここでは(1)大学生活へのスムーズな入門をはかること、(2)経済学の初歩を学び、学習の動機づけを行うこと、(3)演習形式を取り入れ、学生主体で運営することで報告・討論する力量を養うことが目標とされ、35人規模で週1コマの授業が行われている。また、日本福祉大学でも「基礎演習」が20名程度のクラスで、1年次に通年(4単位)で、大学での学習の基礎となる「レポートを書く」「自分の意見を発表する」「議論をする」「問題を発見する」といった学習スキルを身につけることを目標として行われている。前者は経済学の入門、後者は学習技術の習得というそれぞれ異なった特徴・目的を有しているものの、いずれも入学直後の学生に対する学習方法の教授と、慣れない状況でとも

すれば人間関係の構築に失敗しがちな新入学生へのサポートという面では、重要な役割を果たしているということができる。

上記2大学の例とは異なり、本学では Semester 制を採用しているために授業回数が少ないことや、名簿の順番で受講クラスを決定していることなどから、担当教員の専攻分野によって演習の内容が決定されることはなく、あくまで大学における学習に対する姿勢や方法の紹介、あるいは学生の問題意識の喚起といった目的で演習が進められている。そういった点では、専攻学問への入門といった役割を果たすことはできないが、後述するように演習・講義という大学独特の授業形態に合った学習の方法や、図書館やインターネットといったさまざまな資料・文献の探し方、個別あるいはグループによる調査と報告、レポート作成といった基本的な学習法を学ぶことにより、大学入学後の学習に対する不安の軽減と学習意欲の喚起といった役割を果たすことにおいては、他大学の例と同様の効果を得られるものと思われる。

### 3. 講義内容

#### 3-1 講義内容

文化創造学部が設立されてはじめての2000年度「環境文化基礎演習」については、2000年度履修要覧に、以下のように授業計画が紹介されている。

第1講 オリエンテーション

第2・3講 講義活用法

第4～6講 文献検索法

第7～12講 テーマ演習演習

この授業には、テキストとして『大学生の学習テクニック』が、他に参考著書として、『論文・レポートのまとめ方』『理科系の作文技術』が指定されていた。担当教員により、多少のバラつきはあったものの、ほぼこのシラバスに従った授業が行われた。また、文献検索法では、図書館利用ガイダンスが教室での講義の途中で、愛知淑徳大学図書館星が丘分室の協力によって全クラスとも各40分間行われ、インターネットを使った資料の検索講習が、授業とは別時間帯に希望者を対象としてPC1教室にて行われた。

参考までに、筆者の講義計画を示しておく。

#### <講義内容>

<p><b>第1講 オリエンテーション</b></p> <p>演習のねらい・演習のすすめかた・演習の役割分担・ 研究目標・学問的興味を紹介・テーマ研究演習の発表順決定</p>
<p><b>第2講 講義活用法 I</b></p> <p>講義・演習の授業の受け方、ノートのとり方 発表の技法、レジュメの作り方</p>

<b>第3講 講義活用法Ⅱ</b>
レポートのまとめ方、筋書きの作り方、文章の作り方 小論文試験問題を使用しての要点のまとめ方練習
<b>第4講 文献検索法Ⅰ</b>
カードの使い方、新聞の利用、資料整理の方法、資料の所在と探し方
<b>第5講 文献検索法Ⅱ</b>
Webを利用した資料検索法・テーマ研究演習における発表題目の報告
<b>第6講 文献検索法Ⅲ</b>
図書資料の利用法と付属図書館(星が丘分室)での検索講習
<b>第7～13講 テーマ研究演習</b>
受講生の研究報告

講義活用法と文献検索法については、指定されたテキストの該当箇所を参考に講義が行われた。後に紹介するアンケート結果からもわかるように、講義活用法・文献検索法のところで実験とそれについてのレポートを取り入れたクラスもあり、担当教員の専門分野が反映された形となっている。また、テーマ研究演習については、グループによる発表をとり入れたクラスと、個人研究・発表を取り入れたクラスとがあり、個人研究を取り入れたクラスでは、第7講から13講までは全て個人の研究発表とそれについてのディスカッションに費やされたが、グループ発表を取り入れたクラスでは、授業時間内にグループ内でのディスカッション、発表の準備等の作業時間を確保することができた。それぞれについての受講生による評価は、後述のアンケート結果(資料4)によると、賛否が半々である。

この他に、学期末には単位認定の要件として、レポートの提出が義務付けられた。レポートのテーマは、研究報告のテーマとされ、発表時のディスカッションを踏まえて各個人でレポートをまとめることが要求された。クラスによっては、一度提出したものを担当教員がチェックし、書き直しを命じたところもあった。レポートの提出状況は良好であり、未提出のために単位取得が不可となった学生はいなかった。

### 3-2 受講生の報告テーマ

別表(資料1)に挙げたのが、筆者の担当した演習における受講生の入学時の興味・関心と研究レポートのテーマである。これによると、受講生は入学時に抱いていた本学において学びたいことを、ほぼそのまま基礎演習の研究テーマとしていることがわかる。これは、環境文化の中心科目が1年次の前期においてはこの環境文化基礎演習のみであり、環境文化専攻に関連する科目についても、環境文化創造Ⅰ(総論)と公衆衛生論だけであることによって、入学前に学校案内パンフレット等によって抱いたイメージをそのまま演習における研究のテーマとしていることを示している。

受講生の研究レポートについては、バリアフリー（2名）や介護保険といった社会福祉に関係するテーマ、あるいは遺伝子組み替え食品（2名）や食生活、ゴミのリサイクルといった生活環境に関係するテーマ、その他に色や紫外線が人体に与える影響や人体に影響を与える環境要因といった（認知）心理学に関するテーマが多く見られる。「環境」とはいても、地球環境問題のような大きな問題・課題群ではなく、比較的身近なテーマを想定しているということがいえる。

これらのテーマは、講義題目が「環境文化基礎演習」とされていることから、何らかの形で「環境」にかかわるものとなつてはいるものの、先述の立命館大学や日本福祉大学の例のように、「経済学」といった一学問分野内で収めることができないため、多くの学問領域にわたるものとなっている。このため、担当教員の専攻する学問分野と必ずしも一致せず、適切なアドバイスを与えることができない場合が想定される。また、学生個人のテーマが広い範囲にわたるものであるために、講義活用法・文献検索法において行われるディベートやバズセッションにおけるテーマと必ずしも一致させることができず、発表後の質疑応答や討論に積極的に参加することができないといったことも、ひとつの問題点であるといえよう。

#### 4. 学生アンケートの結果

環境文化基礎演習では、最後の時間に全てのクラスで別紙（資料2）のようなアンケートを実施した。その結果（資料3, 4）を紹介しながら、学生の授業に対する姿勢や今後の演習のあり方を検討していきたい。

##### 4-1 質問1

この質問では、講義活用法や文献検索法が、本学で行われているその他の授業を受ける上で役に立ったかどうかを、5段階評価（「5」が高講評を示す）でたずねている。その結果は、5段階評価の「5」が34.2%、「4」が55.0%で、総じて役に立っていると考えられている。また、感想・意見、あるいは扱って欲しい事項などを記入する項目については、未経験のことであったので有益であった、新しい経験であり興味深いという肯定的な評価の一方で、「現地へ直接足を運んで調べることが必要だと思う」「実際のゴミ問題や自然破壊について扱って欲しかった」「内容が浅かった気がした」「ひとつのことを追求してやって欲しい」という演習室の中だけの、文献研究というスタイルに対する不満の声も聞かれた。先述のように、基礎演習はあくまで大学における学習方法の習得が目標であり、講義や研究発表はそのための練習という位置付けではあるものの、興味のあることを自分で学びたいと思っている学生にとっては、学習の「手段」についての説明は、物足りないものを感じられたといえる。一部クラスではこの時間に、担当教員が「授業」を行い、そのノートをあとで提出させることを行ったところもあり、それについての満足感が高かった様子がうかがえる。

#### 4-2 質問2

この質問では、後半の個人やグループによる研究発表について、それへの参加の積極性や、この授業に対する満足度をたずねている。積極性については、評定「5」（積極性が高いと思った順に「5」から点数をつけている）が27.9%、「4」が42.3%、「3」が26.1%となっており、おおむね積極的に参加したと考えている。これについては、必ず全員がなんらかのかたちで発表をしなければならなかったため、「積極的」にならざるを得なかったためと考えられる。また、満足度は「5」（これも満足度の高い順に「5」から点数をつけている）が35.1%、「4」が22.5%、「3」が22.5%となっており、上記の2質問と同じような傾向を示している。

授業の感想・意見について尋ねたところ、個人研究・グループ研究については、それぞれに評価が分かれている。いずれにしても、大勢の前で発表を行うということや、自らがテーマを決定し、それについて自らの手で調べるということに対しては、充実感をもっていることがアンケート結果からうかがうことができる。ただ、演習や準備の時間が足りないことや大学図書館の資料の充実度についての不満、グループ討論や発表についてのディスカッションが積極的におこなわれなかったことへの不満・反省も散見された。また、演習に使われた教室の机の配置について、丸くなれるような工夫が必要であるという指摘や、20名を越す受講生の多さについての不満も少数ではあるが挙げられている。

#### 4-3 質問3

この質問では、環境文化基礎演習だけではなく、環境文化専攻の授業全体について、入学前と前期授業終了後とでイメージが変わったかどうかをたずねている。これによると、最も多いのが評定「2」であり（イメージどおりだった場合には「5」、おおいに変わったと感じた場合は「1」をつけている）、全体の44.1%を占めている。その次が「3」の35.1%であり、その他「4」が9.0%、「1」が8.1%となっていて、イメージどおりだったと感じているものはわずかに3.6%に過ぎない。残念ながら、イメージの変化がよいものであったか、そうでなかったのか、「環境」というものへのイメージなのか、大学の授業についてなのかということについては、この質問から判断することはできないが、少なくとも、大多数の学生が大学入学前に抱いていたイメージを大きく変えていることは確かである。

また、本専攻のカリキュラムや授業内容に対する要望・感想、教員に対する要望を尋ねたところ、最も多かったのが、1年次に環境文化専攻に関係の深い科目が僅かしか配当されていないことに対する不満であった。次に目立ったのが、学生がそれぞれに自分がイメージしていた「環境」と授業内容とが一致していないことから来る不満であった。それは、1週間のコマ数の少ないことや、専門科目が開講されていないことへの不満ともつながっている。さらに、それが「環境文化専攻」が何を学ぶところであるのかわからないといった感想にも結びついていると考えてよいだろう。

この他に目立ったものとしては、大人数で行われる講義における私語の多さに対する不満

が挙げられる。一部には、レポートやテストの負担の多さや講義名から講義内容がわかりにくいことについての指摘もあった。

カリキュラムについての不満は、2年次以降、開講される講義の数が増えるに従って解消されていくものと思われるが、履修単位数の関係で、「興味のない」科目を受講しなければならないという意見は、逆に増えていくであろう。

## 5. 「環境文化基礎演習」における今後の課題

現代の大学生が授業に求めているものは、「自分の興味のあることについて、わかりやすく教えてくれること」であった。そのために設置した「基礎演習」であったが、数字で現れた「高評価」とはうらはらに、さまざまな問題をはらんでいることが、前節のアンケート結果からうかがえる。

講義の前半部分で扱われる講義活用法や文献検索法については、いわゆる「座学」に陥らないように、学生自身が作業をすることが求められようし、後半部分のテーマ研究発表では、特にグループ研究をさせる場合には十分な準備時間を確保できるようにすることが必要であろう。また、ディスカッションが活発に行われるように、それにふさわしい雰囲気づくりや教室内の机の配置といったことについても考えておく必要がある。特に、前半部分の授業の進め方については、後半における各人の研究報告との関連をも考えながら、大きく変更することが求められよう。

大学に入学して間もない学生は、自分の専門にしたい分野に対する学問的要求は非常に高い。そのため、その時期に学生の興味・関心をひきつけておくことは、2年次以降の学生の学習・研究意欲を高めていくためにも重要なことであり、基礎演習においては、受講生の「環境」に対する意識を維持、促進させていくことが必要である。このためには、演習・講義に用いる素材の選定のほか、前半部では特に学生が授業に参加できるように工夫しなければならない。そういった意味では、一部の教員によっておこなわれた、実験や講義のデモンストレーションを用いてのノートやレポートの作成は、ひとつの方策であろうと思われる。また、後半の研究発表においても、レポートをまとめた冊子を作成するなど、学生のモチベーションを高める工夫をしていく必要がある。

### 注

- 1) これとともに学力低下が問題となっている。学力低下の問題については、『世界』（2000年5月、岩波書店）を参照のこと。
- 2) 濱名篤「学生の教育期待の変容と大学評価」『高等教育研究』No.3, April 2000, p.135
- 3) 文化創造学部創設の意図とは、以下のとおりである。

「戦後の急激な技術革新と大衆化社会の実現によって、現代の日本人は未曾有の物質的な豊かさを教授する段階に達した。大量の物質とともに大量の情報も消費されているが、さまざまに国際化、多元化、大衆化し、ともすれば規範を失った過剰で刺激的な文化情報の一方的な受容に陥りがちである。その影響は日本国民の伝統文化や生活文化を見失いがちな傾向を生むのみならず、あるべき将来に向

けた新しい創造活動をも停滞させる傾向を生み出している。…停滞しがちな現代の文化状況を、創造的な視点に基づき文化創造に積極的に取り組むことのできる人材を育成することにより、日本社会の新たな活性化に積極的に貢献していこうとする学部である。」(設立趣意書による)

- 4) <http://www.ritsumeai.ac.jp>
- 5) 藤岡惇「班ごとのアクティブ・ラーニングを励ます授業」, 経済学教育学会編『大学の授業をつくる 発想と技法』(青木書店1998年) p.219
- 6) <http://www.n-fukushi.ac.jp/>
- 7) 愛知淑徳大学「履修要覧2000 文化創造学部」p.38
- 8) 森靖雄『大学生の学習テクニック』大月書店
- 9) 古都廷治『論文・レポートのまとめ方』筑摩新書
- 10) 木下是雄『理科系の作文技術』中公新書
- 11) 貸し出し・返却の手続きと、図書の配架状況の説明, REMEDIOシステム(コンピュータを用いた資料検索システム)の使用法の説明が図書館職員によって行われた。
- 12) PC1教室には, PC9821Xs/U7Wが51台設置されており, ウィンドウズ機を用いてのインターネット講習が行われた。
- 13) 平成12年度文化創造学部前期時間割による

**資料1** 入学時の興味・関心と研究レポートのテーマ一覧

入学時の興味・関心	研究レポート・テーマ
環境が人間に及ぼす影響	紫外線が人体に与える影響
人間の暮らしやすい環境	バリアフリーからユニバーサルデザインへ
福祉関係	バリアフリー住宅について
芸術系, インテリア, 色彩学	流行社会心理学
ゲームが作りたたい	テレビゲームにおけるグラフィックの役割
住居, 生活関係, 都市環境	介護保険について
手話が習いたい, 福祉関係	色が人間に与える影響とは
環境, 生活とのかかわり	ネコの健康によい環境づくり
環境と自分との関係	食生活について
環境問題への対応, 身近なところから	リサイクル
遺伝子組み替え食品	遺伝子組み替え食品
生物学, 森林破壊, 環境ホルモン等	遺伝子組み替え食品
心理学	家族心理学～非行と家庭～
ゴミ問題, リサイクルなど	ゴミのリサイクル
音楽, 芸術関係	「音」について～音楽療法【癒し】～
クローン人間, ダイオキシン	AIDS
人の心理	少年犯罪と心理
人間関係, 人間関係論人	学校環境～現代の子供について考える～
間関係, 人間と社会	睡眠について

2000年度環境文化基礎演習 (E6クラス)

入学時の興味・関心：環境文化基礎演習第1講におけるアンケートによる  
 研究レポートのテーマ：第7～13講(テーマ研究演習)における発表テーマによる



愛知淑徳大学文化創造学部  
環境文化基礎演習アンケート  
クラス名 \_\_\_\_\_

資料2

2000.7.18

前期の「環境文化基礎演習」の授業を振り返って、以下の質問に教えてください。

なお、評定「3」は、「どちらでもない」を示します。

#### 質問1

前半では、講義活用法や文献検索法といった大学における授業の受け方の基本を学びました。ここで扱われた講義内容は、これまでの大学における学習において、役に立ちましたか、あるいはこれからの授業を受ける上で、役に立つと思いますか。

5段階で評定してください。

(役に立つ 5—4—3—2—1 役に立たない)

また、前半の授業について、感想・意見、あるいは扱ってほしい事項などを書いてください。

---

---

---

#### 質問2

後半では、大学のゼミ(演習)における学習の基本として、個人やグループによる研究を行いました。あなた自身はこの研究に積極的・自主的に取り組みましたか、あなたの取り組みの姿勢を5段階で評定してください。

(積極的 5—4—3—2—1 やる気なし)

また、このような授業に対する評価を5段階で評定してください。

(よい 5—4—3—2—1 わるい)

後半の授業について、感想・意見を書いてください。

---

---

---

#### 質問3

環境文化専攻の授業全体について質問します。

入学前と前期授業終了時とでは、本専攻に対するイメージは変わりましたか、5段階で評定してください。

(イメージどおりだった 5—4—3—2—1 おおいに変わった)

本専攻のカリキュラムや授業内容に対する要望・感想、また教員に対する要望などを書いてください。

---

---

---

**資料3** 環境文化基礎演習アンケート集計結果

## 質問1

評点	クラス別集計 (人)						計 (人)	比率(%)
	A	B	C	D	E	F		
5	4	7	5	7	7	8	38	34.2
4	16	9	9	11	9	7	61	55.0
3	2	3	2	1	1	2	11	9.9
2	0	1	0	0	0	0	1	0.9
1	0	0	0	0	0	0	0	0.0
	22	20	16	19	17	17	111	100.0

## 質問2-1

評点	クラス別集計 (人)						計 (人)	比率(%)
	A	B	C	D	E	F		
5	9	6	4	3	3	6	31	27.9
4	8	10	2	11	10	6	47	42.3
3	5	3	9	5	4	3	29	26.1
2	0	1	0	0	0	2	3	2.7
1	0	0	1	0	0	0	1	0.9
	22	20	16	19	17	17	111	100.0

## 質問2-2

評点	クラス別集計 (人)						計 (人)	比率(%)
	A	B	C	D	E	F		
5	6	8	5	7	7	6	39	35.1
4	8	10	10	6	6	6	46	41.4
3	7	2	0	6	4	4	23	22.5
2	1	0	0	0	0	1	2	1.8
1	0	0	1	0	0	0	1	0.9
	22	20	16	19	17	17	111	100.0

## 質問3

評点	クラス別集計 (人)						計 (人)	比率(%)
	A	B	C	D	E	F		
5	1	0	1	1	1	0	4	3.6
4	3	3	2	1	0	1	10	9.0
3	7	9	3	8	7	5	39	35.1
2	8	6	8	9	9	9	49	44.1
1	3	2	2	0	0	2	9	8.1
	22	20	16	19	17	17	111	100.0

**資料4** 環境文化基礎演習アンケート 記述式質問項目の回答内容

## 質問1

- ・大学の授業の受け方について何も知らなかったので、とても役に立った
- ・人にわかりやすく発表するのは大変だった
- ・いままで習ったことのないことだったので面白かった
- ・大学生活について理解できた
- ・レポートの書き方は、ただ自分の意見を書くだけではだめだとわかった
- ・今まで図書館を利用したことはなかったが、便利などところだとわかった
- ・インターネットを使った検索が役に立った・内容が浅かった気がした
- ・学ぶのがはじめてのことが多かったので、とても新鮮だったもう少し具体的に作業ができるとよかった
- ・レポートの書き方を教えてくれて役に立った
- ・もっと発表の場を増やすといい練習になる
- ・もっとレポートの書き方を詳しく教えて欲しい
- ・クラスのみんなどもっと仲良くなれる場があったらよかった
- ・現地に直接足を運んで調べることが必要だと思う
- ・もっとひとつのことを追求してやって欲しい
- ・自分の好きなものをレポートとしてかけるので、他の授業より楽しかった
- ・授業の進み方が遅くて時間がもったいなかった
- ・難しい内容が多くてよくわからなかった
- ・レポートの書き方が知りたかったので、もっと薄いテキストでよい
- ・環境に関する勉強をすると考えていたら、レポートの書き方の勉強などだったので、思っていたのと違った
- ・もっと少人数で、いろいろ話し合いのできる授業もやっていきかけた
- ・実際のゴミ問題や自然破壊について扱って欲しかった
- ・少人数の講義だったので真剣に取り組みやすかった
- ・長久手との差が気になる、新しい本ももっと入れて欲しい
- ・実験、ビデオから自分でノートを作成する力がついた
- ・食品など、幅広いことが学べてよかった
- ・授業のために図書館をよく利用するようになった
- ・実験などを行って、理系の授業みたいだった
- ・以前から知っている知識よりもっと詳しく知ることができてよかった
- ・はじめてのノート提出でとても戸惑った

- ・ 環境と健康について身近なことを調べていろいろなことがわかった。こういうときでないと詳しく調べて考えることがないので、よい機会だったと思う。
- ・ 実験をもっとやりたい・レポートの書き方がわかったようで、わからない気がする
- ・ もう少し環境問題についてやって欲しかった
- ・ 週に2回くらいこの授業があってもよい。そうしたら、調べたことをもっと深く追求できたと思う

## 質問2

- ・ 研究によって新しい発見ができた。
- ・ 人前で発表することは普段ないから、調べるときにすごく苦労した。
- ・ ひとつのテーマを決めていろいろ調べレポートのまとめ方などがわかった。これから大学ではレポートの提出がよくあるので、とてもいい勉強になった。
- ・ 研究をすることでたくさんの本を読むことができてよかった。
- ・ 後半は、自分の興味のある分野を調べられたので楽しかったです。
- ・ もっと時間が欲しかった。限られた時間の中で、調べて発表することを目標にやったことはよかった。
- ・ 自分の選んだテーマだったので興味のあることで結構やる気が起きた。だけど、話が広がりすぎちゃったりして、まとめることの難しさがわかった。
- ・ 自分のいま研究したいことを個々に取り組めたのでいいと思う。
- ・ 自分の興味のあることについて調べることができたので、レポート作りも結構楽しかった。グループ研究じゃなくてよかった。
- ・ もっと少人数でのグループで何かについての研究やどこかへ課外授業がしたかった
- ・ レポートの内容を変えたくなくなったけど、時間の関係でそのままにしてしまったのが心残りです。
- ・ レポートの資料を探すのに図書館を利用したけど、少し資料が少ないと思いました。
- ・ 早くから口頭発表やレポートの実践をさせるのはよいと思います。
- ・ 社会で問題になっていることを自分で取り扱うことによって、身近に感じるようになるようになったので、よかったです。
- ・ みんなの発表を聞いてとても参考になった。お互いの意見を交換し合うのは大学では貴重だと思った。
- ・ 丸い机だとグループに分かれたときに意見の交換がしやすいと思うが、四角い机だとどうしても遠くに座っている人の意見が聞きにくい。
- ・ 最初だから、グループでやる時間が欲しかった。そのほうがコミュニケーションが取れる。

- ・ グループで調べたりするのが楽しかった。ただ単に講義を聴くよりやる気がでた。
- ・ まだ始まったばかりだったから、いまいち自分の専攻したいことがはっきりとしていなくて、研究にも発表にも困ったことが多かった。
- ・ みんながどのようにレジュメを作ってくるのか毎回楽しみだったし、いろいろ学べてよかったです。もっと言い合えるようになればよかったかも。
- ・ 一つのことをみんなで調べても、同じようなことばかりで面白くないが、個々が違うことを調べ、発表すると、今まで自分が興味を持っていなかったことを知ることができてよかった。
- ・ 2度とやりたくないと思った。からだに悪い。発表を聞くのは、最高にいい。
- ・ グループで話し合ったとき、まだみんなとそんなに仲良くなっていなかったので少し困ってしまった。

### 質問3

- ・ 環境に関する講義が少ないのでよくわからないが、もっと環境について勉強できるのだと思っていたので今の辞典ではイメージと違うところがある。
- ・ もう少し専門的なことができたと思った。
- ・ 自然科学系統ばかりだったから、ちょっと残念だった。
- ・ 環境という面はやることが分かってきたが、文化という面でいまいちはっきりしませんでした。
- ・ 授業を受ける人数が多すぎて、私語だらけだと思う。うるさくて集中できないこともしばしばなので、人数を減らすなどして欲しい。
- ・ いまいち何を専攻かわからない。
- ・ 入学するまで理系だと思っていたが、教員もその辺を理解して教えて欲しい。
- ・ 環境文化という専攻をしたが、やはり表現文化専攻が気になる。
- ・ 環境文化専攻は範囲が広すぎて困る。色彩とかそういうものが学べると思って入学したが、実際は環境問題的なことばかりでちょっとやだ。
- ・ 文化創造総論が全員必須はつらい。
- ・ もっと硬いイメージがあったのですが、意外と多様性に満ちていて驚きました。
- ・ 授業が余り開講されていないので、ほんとうに単位が取れて卒業できるか不安。
- ・ 余り環境文化についての授業がないので、2年からの授業が楽しみです。
- ・ もっと早い時期から専門科目を入れて欲しい。
- ・ 自分のやりたいことがまだやれてない気がする。

- ・ 中国文学や日本語論など、環境に関係がない授業はとりたくない。
- ・ 次の授業まで4時間待ちなんていう日が2日もある。できるだけ避けたい。
- ・ レポートが多すぎ、テスト也多すぎ。
- ・ もっと環境のことをやると思った。
- ・ 授業数が少なく選べなくて、内容も浅いので、余り興味のもてる授業がなかった。
- ・ 「家政」に関することから見た環境の勉強がしたい。
- ・ 資格のカリキュラムを組んで欲しい。
- ・ いま取り組みたいことがだいたい講義の中にあって、好きなことに取り組める。
- ・ 国語や社会の授業があるとは思わなかった。もっと数学的、理科的な科目がやりたい。
- ・ もっと少人数で研究をしたかった。そして少人数でどこか課外へ出て自然などを見てきたかった。
- ・ 1年の前期は環境文化専攻の中心科目がなかったので残念だった。
- ・ 環境に関するひとつのテーマを掘り下げて学びたい。
- ・ 授業の名前が魅力的でも、内容がいまいちの授業が多かった。
- ・ TOEICは力がついたのかよくわかりません。あのやりかたでは。
- ・ 食物関係をもっと多く取り扱って欲しい。
- ・ ある先生の私たちに対する命令口調で行う授業は苦痛でした。
- ・ ノートを取るのが苦手で、授業に来るのが億劫になってしまった。
- ・ もっと実験を使った授業がしたい。
- ・ 他の専攻の科目も受けなければならないのがつらい。
- ・ 環境のことは自分たちの周りのことなので、自由に調べることは、自分たちのこれからの生活に少しでも役立つと思いました。
- ・ 生活環境(住環境)について学びたかったが、どちらかというと理科系に近いので、少し戸惑った。
- ・ まだ何を勉強しているのかははっきりしないので、環境文化らしい授業をやって欲しい。
- ・ 環境といってもいろいろと幅が広く、いろいろな分野のことをやっていけることがわかって興味の幅が広がった。
- ・ ただ環境について学ぶだけかと思っていたが、楽しくグループで分かれてできて、大学生らしくできてすごく楽しかった。
- ・ 講義の内容がわかりにくいものが多かった。
- ・ 衣食住についてたくさんやると思い、ここに入ったので、もう少しそういう分野の授業やカリキュラムを作って欲しい。
- ・ 授業の中で環境問題のさまざまなビデオなどを見て、知識を増やしていきたい。

2000年7月18日実施。環境文化基礎演習における授業アンケートより  
重複するものは省いた。